



9月27日 奥浦小中合同運動会「玉よ、カゴを目ざせ！」



発行

カトリック浦頭教会  
 広報委員会  
 五島市平蔵町2716  
 TEL 0959-00072  
 印刷・(株)才津印刷所

「島のひかり」ホームページアドレス

<https://shimanohikari.jimdofree.com/>

してあげたの？  
させていただいたの？

主任司祭 工藤 秀晃

紙面になると、どうしても無機質な文字の羅列のようになってしまい、「ああ、あった、あった」とか「そうそう、そうだった、そうだった」とかといった具合に、できれば同世代のどなたかに共感していただきたいにも拘らず、この思いはきつと半減するのだらうなあなんてジレンマを感じながら、それでもやっぱり書かせていただきます。

「♪すきすき、すきすき、すき、すき、愛してる。すきすき、すきすき、すき、すき、一休さん♪」

子どものころ、この歌詞で始まる「テレビアニメ 一休さん」を見るのがとても楽しみでした。オープニング曲が聴こえてくるとき、有名な「このはし渡るべからず」や「屏風の中の虎を捕えよ」を始め、投げかけられる様々な難問・奇問に対して、それらを持ち前のトーチで退けていく姿に、何となく羨望にも似た思いで見ていることを懐かしく思い出します。さて、最近そんな一休さんというか、大人になった一休和尚のちょっと考えさせられるエピソードに触れましたので、分かち合いの意味も込めてご紹介したいと思います。

【一休和尚がある時、寺の山門を建て替えるため、仏縁の人々から寄付を募ると、高利の金貸しをしている伝兵衛が寄付を持ってきた。

「ここに金子が百両あります。山門の建て替えるの費用に充てて下さいまし」。特に「百両」に力を込めて言った。

すると、「ふむ。承知した」和尚はぶっきらぼうにそう言ってそっぽを向いてしまった。

伝兵衛は不平でならない。百両という大金を寄付しようとしているのに、今の挨拶は何事かと、再び和尚の顔を見ながら、「百両でございませうよ、はなはだ少のうはございませうが…」と金包みを押しやった。

「百両…そうか、承知した。」和尚は相変わらずそっぽを向いている。

伝兵衛は腹が立った。大金をもらうのに「ああそうか」とは無礼千万。何とかお礼の言葉もありそうなものだ。

「和尚様、百両は少ないのかもしれないが、伝兵衛の身にとっては身分に過ぎた寄進と存じます。何とか、もうすこし挨拶が…」

「…もっと礼を言えということか」

「いえいえ、そういうわけではありませんが、手前の心をも察して…」

「バカな！お前が善根をするのに、なぜわしが礼を言わねばならぬのか！」

人は何らかの行為を行ったら、特にそれが一般的に「良い行い」といわれるものであれば、そこに何かしらの思惑が有るか無いかは別にして、その行いに見合う正当な評価や賛辞を求めてしまつのが常だと思えます。いわゆる、「いいね！すこいね！すばらしいね！」といったことを求めてしまつ「承認欲求」です。また反対に、その善行に触れたり、その恩恵に与ったりした人が「心ある人」ならば、自ずと感謝の言葉を述べたり謝意を表したりするのも世の常です。特に日本の文化は、「察しの文化」だと評されることもあり、なおよさること相手の意を汲んだ反応がなされることが多いかと思えます。

しかし、本来「良い行い」は自分のことではなく相手のことを思いやり、推し量って益となることをなすのですから、「○○させていたいただいた」との気持ちはあったとしても、「○○してあげた」という気持ちはないはずなのでしょうが、自分を省みると、この伝兵衛のように自分の期待と違つと、ついつい「せっかく○○してやったのに…」との思いがムクムクと湧き起こって、まだまだ未熟な自分に気がかされるのです。

深まりつつある秋。「バカな！お前が善根をするのに、なぜわしが礼を言わねばならぬのか！」との一休和尚からの叱咤でありながら、問い掛けのようにも思えるこのことばに、ロザリオを通してイエス様の生涯を黙想しながら答えを見い出せたらと思えます。

**交流会**

**ミニソフト  
バレーボール大会**

女性会会長 川口 秀子

本来ならば「第二回下五島地区女性部ミニソフトバレーボール大会」が開催される予定でしたが、今年度は皆様、御承知の通り色んな行事が中止になる中“交流会”という形で開催する事となりました。

当日（九月二十二日）は三教会より有志と司祭団、合わせて



三十名程が和気あいあいと楽しんでくれました。交流会という事で、全員での交流を……とも考えましたが、やはり同小教区の顔見知りの方が一層楽しめるという事で、小教区別で戦う事としました。このコロナの影響で、どの小教区も体育館の使用許可が下りない為に練習が出来ず、ぶっつけ本番でした。その為、準備運動はしっかり!!と思いい、ラジオ体操のCDを準備したのですが、流れてきたのはドラえもんの声優の声で、笑いが起こりました。楽しみながらも、しっかりと準備運動ができた有志及び司祭団の方々は、いざ試合開始!!総当たり戦で、全チーム三試合を行ない、無観客ながら、同チームや他チームの声援や拍手で、楽しみの中にも“本気”で頑張れました。

順位は昨年同様、三井楽小教区が優勝、浦頭小教区は第二位、奈留小教区が第三位でした。司祭団は主催者という事で順位付けは行わず、商品の準備をして

チーム・個人を労って下さいました。何より怪我なく終れた事に感謝したいと思います。

有難うございました。そして、お疲れ様でした。

**折鶴**



**被爆七十五周年に  
思いを寄せて**

被爆七十五周年の節目の今年、例年八月に行われていた平和行事がコロナによる中止の為、我々小教区でも何かできないものかと協議した中で、折鶴を奉納するように決定した。

どのような大きさ・色・紙の種類でも良いが、中に平和に対する思いを書いたり、思いを寄せて折って下さいと呼び掛けた。ミサ後にも用紙の配布を行ったが、幼児から御高齢の方まで、男女問わず快く受け取られていた。一人五枚程度配っていたが、まだ頑張って折りますと、多くの方が再度受け取りに来てく

ださり感謝!!

私自身、子供の頃は折る事もあったが、大人になって折った記憶はほとんど無く……もらってきた用紙は小さい方ばかりで、太い指で悪戦苦闘しながらも、どうにか折り終える事が出来た。色とりどり集まった折鶴はシスターに糸通しして頂き、八月十五日のミサにて奉納した。

信徒・慈恵院から集まった二千三百羽余りの折鶴は、皆さんの思いとともに、長崎原爆資料館に届けられました。



# 浦頭小教区の歴史及びデータから考える今。

1

今年、浦頭小教区は設立五十年を迎えました。島のひかりでは、今の現状と五島カトリック及び小教区の歴史を数回に渡って掲載します。

まず小教区の歴史に触れる前に、五島カトリックのそれについていきます。

五島のキリシタンの歴史は、フランシスコ・ザビエルの鹿児島上陸の十七年後の一五六六年にさかのぼります。時の五島藩主、宇久純定の求めに応じて、ポルトガル人のルイス・アルメイダと日本人のロレンソが来島します。二人の説教を聞き、感銘した純定は教会を建てる場所を提供し、家来の二十五名がカトリックになったと記されています。その後、アルメイダとロ

レンソの熱心な宣教は純定のキリシタン庇護と、カトリックになった純定の子・純堯の力強い活動につながり、純堯が亡くなる前には、信徒の数は二千名になったと言われています。

純堯の没後、純玄が二十代領主になりましたが幼少な為、実権を握った叔父がキリシタン嫌いだった事で迫害が始まります。更に、一五九七年の長崎の西坂

での二十六聖人の殉教に代表されるような豊臣秀吉の禁教も重なり、迫害は凄絶を極めます。一六一二年にキリシタン禁制の高札が立てられ、宗門改めが行われ、踏絵が年中行事で行われる事もあり、五島のキリシタン

はいつしか残滅するに至りました。

そうして、キリシタンの芽は

なくなっただかに思われましたが、一七九七年、五島藩主・盛幸から大村藩主・純鎮すみやすに対して農業者移住の要請があります。それに呼応したのが、長崎市の北側、西彼杵半島外海のカクレキリシ

タンの人達でした。その地の俗謡に「五島へ五島へと皆行きたがる。五島やさしや土地までも。」とありますが、その俗謡は、後で「五島極楽 来てみりや地獄 二度と行くまい 五島ヶ島」と変わっていきます。最初に居た人達は地下じげ、後から来た人達は居付きと呼ばれ、不便でやせた土地しか与えられませんでした。

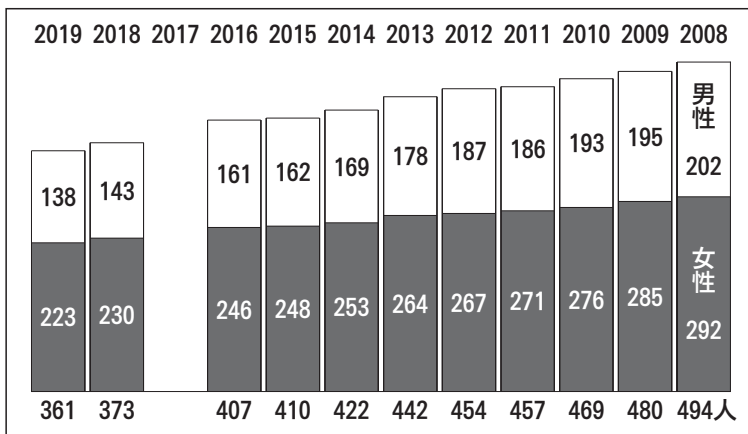
移住の第一陣は奥浦の六方の浜に百八人が上陸したと言われています。



## 浦頭小教区 信徒数推移

2008 & 2019

各年間、多い時で二十人、少ない時で三人減っています。なお、二〇一七年は統計数不明です。



次号以降では、経済面における推移について取り上げて行くと思います。



# アフリカへ

青年海外協力隊員として二〇一九年一月、アフリカ・ザンビアへ派遣された木口未優さん。幾つもの貴重な体験を重ねていましたが、二〇二〇年のコロナ禍の為、協力隊員全員に対する帰国指示が下り、日本に戻って来ました。以下、木口未優さんの文章です。

## 心に、いつまでも、ザンビア

木口 未優

自分を大切にしたい。ザンビアに行ったことで強く感じた、私の思い。一年二ヶ月、毎日「ちょうだい」と言われた。貧しい人から水をちょうだい、食べ物、お金をちょうだい。ある程度豊かな暮らしを送っている人からパソコン、スマホ。本気で言われることもあるが、彼らにとっては

冗談や挨拶の一つである時もあった。わかっていても、心に余裕がない日はいちいちイラつく。心ない態度をとる自分が情けなくて、またイラつく。自分がこんなにも小さな人間だとは知らなかった。

「おい！ドナー（寄付者）！」とすれ違う人から言われることもあった。ザンビアは金銭的にはアメリカやイギリス、インフラ整備では中国から多くの援助を受けている。また、中国、インドの企業進出も目立つ。アフリカの多くの人にとって、肌の白さは豊かさの象徴。白人や黄色人種は皆お金持ち。

病院で勤務していても、物資や必要経費など、上司から「ミユのここ（JICA）から予算はおりないのか？」と言われる。私のようなちんちくりんに頼むことが恥ずかしいと思わないのか。彼らのプライドの低さ、他人にすぐ頼る態度に、もやもやしたことも数知れず。しかし、彼らにプライドを捨て

てさせ、競争心を奪い、白人は与える側、黒人は与えられる側、という意識を植え付けているのは、私たち白人や黄色人種などではないか。援助というと聞こえはいいが、結局は人間の汚い考えの結果なのではないか。

自分の活動だってそう。ザンビア人のため、と思ってているが、本当にその人のためになるのか。人のため、って何なんだろう。ザンビアに来たことが間違っているような気もした。



もやもやとする中、今後の活動計画を上司たちに相談すると、「やりたいなら、やってみなさい。」「うまくいかななくても、諦めちゃだめだ。」と言われた。

心を見透かされた気がした。でも、この時感じた、心がすっと軽くなって、じわじわと熱く、高まった感覚はきっと忘れない。人のため、じゃない。自分のため、でいいのだと思う。自分の心で考えて、納得する道を選びたい。自分の選択に責任を持ちたい。自分を大切にしたい。それが結果的に人のためになればいいんじゃないかな、と思う。都合の良い解釈かもしれないけれど、これが今の私の思い。

勢いに任せて書き、ザンビアの魅力を全く伝えられていませんが、ザンビアに、アフリカに、興味を持ってくれる人がいれば嬉しいです。

# 「すべてのいのちを守るための月間」設置について

日本の司教団は、教皇フランシスコの訪問にこたえて、今年から「すべてのいのちを守るための月間」を新設。九月一日から十月四日まで行うことを決定した。

教皇フランシスコは、深刻化する環境問題について、「エコロジカルな回心」が必要だと言われています。

すなわち、「わたしたちは…、万物のすばらしい交わりである宇宙の中で、他のものとともにはぐくまれるのだということ、愛をもって自覚」し、「行いや怠りによって神のものである被造界を傷つけてきたことを認め」、環境問題をあえて自分自身の個人的な苦しみとし、一人ひとりがそれについてできることを見つけ出すことが必要だということでしょう。

それに向けて日本司教団は具

体的な取り組みを掲げました。

○ 毎年九月第一日曜日に、全国で一斉に祈り、各共同体で具体的な行動を起こす。

○ 期間中、「すべてのいのちを守るためのキリスト者の祈り」を唱える。

○ 地球環境の実態について学習し、エコロジー教育を推進する。

○ 行政、自治体、環境保護団体などと連携して活動する。



さて、浦頭



小教区では信仰・観光の拠り所である堂崎天主堂周辺の海岸清掃を、十月十一日に行った。九月の台風・大雨により、プラスチック・倒木の漂着ゴミに埋め尽くされていた海岸線は壮年、女性、シメオン・アンナ会、奥浦地区まちづくり協議会の協力のもと、無事に終えることができた。

## 秘跡

◎ 永遠の安息を祈ります。

・ マグダレナ 中村フミ 93歳

七月二十九日 死去

三十日 告別式 浦頭

・ マリア 清川アイ子 89歳

十月八日 告別式 嵯峨瀬

◎ 御結婚おめでとうございます。

新郎 鍋内 利輝 南河原

新婦 川口 怜美<sup>さとみ</sup> 浦頭

十月十日

# “ありがとう”

次の方々より多額の御芳志をいただきました。感謝いたします。

佐世保市 松田トミ子様

上五島町岩瀬浦郷福見

千葉市 峯下 笑子様

千葉市 入口 春男様

### ◎ 転出

木口 恵 福岡教区古賀教会



# 『私たち 結婚しました』

鍋内 利輝



この度、私事ではありますが、浦頭教会にて結婚式を挙げさせて頂きました。神父様をはじめ、私達の結婚式に協力して頂きました皆様にお礼申し上げます。私達は共に洗礼を受け、祈りをささげてきた浦頭教会で式を挙げられたことを、幸せに思います。

簡単に自己紹介しますと、私は鍋内家（父・誠次、母・由紀子）の長兄として生まれ、高校卒業まで五島で過ごしました。高校卒業後、大学進学を機に五島を離れ、佐賀で過ごしました。大学をどうにか四年で卒業した後、佐世保の建設会社に勤めることとなりました。そして、社会人五年目の平成三十一年に五島に戻ってきて、今日に至るところです。結婚した怜美さんとは、社会人一年目からお付き合い

いしておりますので、結婚まで六年要したことになります。最初は佐世保（利輝）と熊本（怜美）でしたが、お互い五島に帰ることができたため、五島で結婚することとなりました。私たちはこれから、楽しいことだけでなく、多くの苦難に直面することがあるかと思いますが、神様に助けて頂きながら二人で協力して乗り越えていけるよう、努めていきたいと思えます。最後に、皆様のご多幸をお祈り申し上げて、私の報告とさせていただきます。



## 保育園運動会



十月三日、平和のばら保育園にて運動会が開催された。コロナウイルスにより何かと自粛のご時世であるが、園児の練習の成果、子供達の成長を見る為に、色々な制約を設けて行われた。

オープニングは平和太鼓!! 年長・年中園児はリズムの取れたバチさばきと軽快な動きにより見る者を魅了した。また、大きな太鼓の響きは周辺地域に

も届き、皆さんに元気を与えたのではないかと思う。

続いて徒競走

名前を呼ばれると大きな返事をし、ライバルに負けたくない、どの子も一生懸命走る姿に保護者も「ガンバレー」と声援。少ない種目ではあったが、親子競技やリレーも盛り上がった。当日まで園長先生をはじめ、職員の方々は相当苦慮された中で開催であったと思う。保護者の御理解もあり、制約の中でも充実した運動会となった事に感謝します。



保護者によるシャボン玉のプレゼント

# 友だちの友だちは パパ様

江口初子



七月のある日、電話のコールが。「ガルシアです。」と、その人は昨年十一月二十三日の教皇訪日長崎の時に西坂教会(二十六聖人記念聖堂)で雨の中、パパ様とハグされていた、パパ様の三十年来の古い友人のスペイン出身のアントニオ・ガルシア修道士(90)その人でした。我家とは片岡神父様が主任のところで、二十六年位前の夏、彼は司祭館に泊っていました。超特大級の台風が来るというので、交

通・学校・会社その他、ストップになっていましたが、当日、台風はどこへいったやら快晴!!そこで歩いて壱ノ浦へ。その帰り対岸に見えた堂崎教会を目指し、浜泊公民館を曲がって辿り着いたのが峠の我家。そこで彼と車で五島観光に。会ったのは、その時の一回だけ。年賀状とたまに彼からの電話だけですが、大事な友人です。話は戻って、電話はバチカンよりパパ様と再会の時の写真が送られてきて、その喜びを一人の胸におさめきれず、その写真を観てほしいと：私もテレビの放送で何度も観ましたが、本人にとっては特別な想いが蘇ってきたのでしよう。声はハッピー全快!後日、私の元気な声を聞けて嬉しかったと一筆添えられて写真が三枚送られてきた。八十三才と九十才の殉教者の丘での抱擁のベスト・ショット。まさに、神様からの

色々な想いが込められたプレゼントだったのでしょうか。これからもお二人共にお元気で、必要としながら、されながらの活躍を祈ります。ちなみに、「焼場に立つ少年」をパパ様に紹介したのはガルシア修道士なのですよ。

## 浦頭小教区

### 50周年閉幕式

九月六日、二番ミサ後、閉幕式を行ないました。信徒を代表して、議長である赤尾一美さんが挨拶を述べた。

小教区設立五十周年の閉幕式に当たり、一言挨拶を致します。昨年九月十五日の記念式典から早一年を迎えます。

高見大司教様をお迎えして、記念碑の除幕をはじめ、地元出身神父様、歴代主任神父様、下五島地区主任神父様方の御列席のもと、荘厳な記念ミサが行われました。又、出身シスター方

の参加を頂き、この上ない歓びとなった五十周年でした。

これも一重に、皆様お一人お一人のお祈りのうちに、多大なる御支援助と御協力のお陰です。

更に、県内外からの心温まる多額の御支援助をお寄せ頂き、記念事業を計画的に進める事が出来ました事を、心より深く感謝申し上げます。

何よりも、この記念事業を成功裏に導いて下さいました、主任神父様をはじめ、シスター方皆さんの支えと御指導の賜物であり、信徒一同深く感謝致します。

最後に、五十周年に携わって頂いたすべての人に感謝しつつ、新たな一歩に向かって『今語り継ごう尊い信仰、子へ孫へ』の標語のもと「子どもたちも私達大人も」共にこの浦頭小教区を次の世代へと繋げて行けますように願いながら、五十周年の閉幕式の挨拶に代えさせて頂きま

評議会代表 赤尾 一美

# ペタンク・ グラウンドゴルフ 大会開かる

## 奥浦地区 子供教室



コロナ禍でも、奥浦の子供達は元気で  
す。奥小・奥中そして、保護者が四十名程、奥小グラウンドに集まって、笑顔いっぱい球遊びに興じました。

今年の子供教室も、三密を回避しながら、せいっぱい子供達に健全育成の場を提供します。



## 夏休み作品展

「奥浦地区・公民館長賞」決定!

奥小・小田蒼海 自由研究

電気の省エネについての研究

紙面のスペースの都合により概略のみ。

(きっかけ) 電気の使用量のお知らせを見て電気の使用量、CO<sub>2</sub>排出量が気になった。

(調べ方) 月の電気使用量に0・347をかけると月のCO<sub>2</sub>排出量が分かる。

(感想) 電化製品でかなり電力消費が違う事。これからCO<sub>2</sub>の排出量も意識していきたい。

## 奥中・鍋内玖怜彩「命の献血」



## 奥浦小中学校 合同運動会

去年、一昨年と天候に恵まれず中止になっていた奥浦地区の運動会。今年は世界的に大流行している新型コロナウイルスの影響で開催が危ぶまれましたが、小中学生の競技のみの合同運動会という形で何とか九月二十七日に開催する事が出来ました。

コロナ禍の影響で、保育園児や地区の年配の方々が参加出来ず少し寂しい感じはしましたが、奥浦の子供達はそんな状況も何のその、とても元気一杯な姿を、かけっこや綱引き、玉入れ、小学生のエイサーや中学生のソーラン節などで、盛大に見せてくれました。

小中学生のみの午前中だけの少し寂しい運動会。来年はコロナ禍も治まり、地区の方々が楽しく参加出来る運動会が開催されることを、祈りたいと思います。

## 編集後記

WHOが新型コロナウイルスを認定したのが一月の八日。もうすぐ一年が経とうとしている。行事、集会等は徐々に緩和されつつあるが、いまだにテレビのニュースではコロナ感染者の数が躍る。終息する時期が来るのだろうかかと不安になる。定かではないが、あるメディアによると、コロナウイルスは人に感染しながら型を変え、現在三種類ほどの型が存在するという。そうなる人類は、インフルエンザと同じように生涯付き合っていくかなくてはいけなくなるのか。それに加え、地球温暖化がもたらした異常気象による豪雨災害。直近では五島列島の上空を通過した巨大台風九号と十号。海水温が高いため、弱まることなく上陸したとのこと。初めて「避難生活」を体験した。これらは全て自然災害だろうか、人的災害だろうか。

竹山 巧